

實相寺 花園會報

令和六年
五月一日発行
發行所
臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園會
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL.087-889-3838
編集發行人
山本文匡
<https://www.jissouji.net>

第181号

お寺の掲示板

仏道ぶつどうをならふといふは、
自己じこをならふなり。

ならふといふは、
自己をわするるなり。

自己じこを
わするるといふは、
万法ばんぽうに証しやうせらるるなり。

ならふなり
万法に証せらるるといふは、
自己の身心しんじんおよび他た己この身心をして
脱落だつらくせしむるなり。

道元だうげん禪師

『正法眼蔵』道元禪師

方は、とてもストレスフルです。一方仏教の場合、自分の価値とは何か？と問われれば、それは「空」であり「無我」であることだと言えます。言い換えれば定まった自分というものが無いからこそ、その価値は無限大なのです。

歌舞伎役者の初代中村吉右衛門（一八八六〜一九五四）は加藤清正が当たり役で、清正に成り切って演じたことで有名です。役者は様々な役柄に成り切ることで、何人もの人生を生きていくことができますが、私は私達の人生もまた一幕の舞台のようなものだと思います。人は誰でも生まれ落ちた瞬間か

ら、名前や様々な設定を与えられます。役柄を自分で選ぶことは出来ませんが、脚本はないのでどう演じるかは自分次第です。舞台上には主役もいれば脇役もいますが、全ての役に意味があります。脇役だから価値が無い訳ではありません。全体で一つの舞台です。

考えてみれば、本来は何者でもない私達が、縁に因って与えられた一度限りの舞台です。その中で如何に自分に成り切れるかが重要なのです。それぞれの役柄には、かけがえのない価値があります。それが「天上天下唯我独尊」ということだと私は思うのです。

「降誕会について」

GW明けに刑務所の「花まつり」で法話を担当するので、あらためてお釈迦様の誕生を祝う降誕会について考えてみたいと思います。お釈迦様は4月8日無憂樹の花が咲くルンビニーでお生まれになりました。伝説では、生まれてすぐ東西南北に七歩歩まれ、天地を指差して「天上天下唯我独尊」と仰ったといひます。

しかしいくらお釈迦様でも生まれてすぐに歩いたり、喋ったりすることはないでしょう。これはお釈迦様を尊敬する人々が後に付け加えた物語だと思ひます。きつとお釈迦様も「オギャーオギャー」

と元気な産声をあげたに違ひありません。ただ後世の人々は赤ちゃんの産声を、お互いに自分という存在は世界中にたった一人しかいないんだ、という気づきの声として受けとめたのかも知れませんが、ですから降誕会はただ単にお釈迦様の誕生を祝うだけでなく、自分自身の命についても考える機会としたいものです。

妙心寺派布教師の大先輩である松原泰道師は生前よく「誕生日はお母さんに感謝しましょう」と仰っていました。今でこそ医療が発達し、赤ちゃんが生まれるのはあたり前のことなのですが、出産は昔も今も命懸けです。

お釈迦様の母マーヤ夫人もお釈迦様を生んだ七日後に亡くなっています。幼い頃から文武に優れるだけでなく、畑の虫を鳥がついばむのを見て酷く悲しんだという、とても感受性の強い子供だったお釈迦様のことです。きつと自分が生まれた為にお母さんが亡くなったことを知った時は悩んだことでしょう。後の出家にも影響を与えたと思ひます。果たして自分はこの世に生まれてきた価値があるのか？この問いは、ひとりお釈迦様だけの問題ではありません。

最近では子供の自己肯定感を高める為に、褒めて育てる風潮がありますが、いくら家庭や学校の中で

は大切にされても、社会に出たらそこには厳しい競争があります。「門より入るは家珍に非ず（他から得たものは家宝にはならない）」という禅語がありますが、社会人として自立するには、やはり自分の価値を自覚する必要があります。しかし、これはいくら周りが褒めたからといって身に付くものではありません。

では自分の価値、自分の尊さとは一体何でしょうか？一般的には他者と比較した時の優劣でしょうが、相対的価値を追い求めるのは大変です。常に生き残りをかけて新しい知識やスキルを学び続けなければなりません。そうした生き